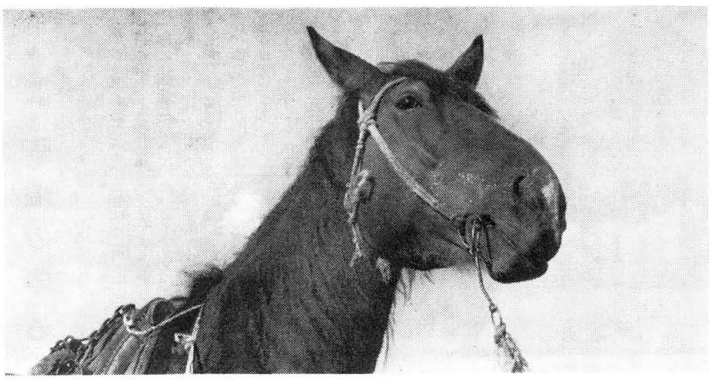
宗像

毎月一日発行
発行所
宗像大社
福岡県宗像郡玄海町
電話神湊133番
定価一年送料共500円

天高く……

馬嘶いて白日暮れ
菊香りて秋気来る



表千家家元奉仕
献茶祭きまる
――十月十五日に――

去る九月二十一日、恒例の献茶祭についての打合会が当大社で開かれた。

表千家同門会、出光興産関係者と大社の職員が出席し、諸準備について懇談した。

表千家家元が直々に奉仕されるこの献茶祭は今年で六年目、出光興産店主の格別な肝入りで行われて来たが年々盛大になり、昨年では神社の規模に狭隘さを感じるようになった。

特に今年は、十五日が日曜日で交通安全の御祈願を受けられる参拝者も多いと予想され、加えて九州一円の同門会関係者が参集される為、社頭の整理及び副席される方々の誘導等が検討された。

年々人員が増加されるので、今年は定員を超えないように、昨年来られなかった方々に出席していただくようにしたいとの事である。

当日は東郷から大社まで、献茶関係者専用の臨時バスが運行される。

家元が奉仕される献茶祭は午前十一時からで、正午までの間、交通安全の御祈願を受けられる各位にはお待ちいただく事になる。

又、家元が拝殿でお点前される間、八ミリ等の写真撮影をされる方々には、「茶の心」を妨げないように願いたいと関係者に要望している。

参会者は、遠く広島、山口、鹿児島、長崎方面からも集まり、現在では、西日本最大の茶会となっている。

第一回　昭和三十七年十月五日
第二回　昭和三十八年十月八日
第三回　昭和三十九年十月十日
第四回　昭和四十年九月二十六日
第五回　昭和四十一年十月十六日

副席は午前八時から社務所と清明殿に於て催される。

神具、装束
結婚式場用品
株式会社　井筒
福岡市吉塚西林寺町　西林寺内
電話　九五六
福岡支社　福岡市(65)九九六六
京都市下京区油小路通六条北入
本社　京都(65)〇〇六六・三三四番
電話　京都(65)〇〇六六・三三四番
〇七〇・九七九九番

説論
戦没学徒の遺稿
「くちなしの花」を読む

この遺稿は、去る大戦の末期、昭和二十年四月金華山沖で散華した宅島徳光海軍飛行予備中尉が、航空隊に勤務の間書き遺した日記風の手記である。

彼は福岡市の出身、慶応大学法学部に在学中、学徒出陣の列に加わり、第十三期飛行予備学生として、三重海軍航空隊に入り、出水、宮崎等の航空隊に勤務して、最後は松島海軍航空隊附となる。

「亡き吾子のこよなく愛すくちなしの花にたれて咲くや寂しき」の一首は、宅島中尉の父徳次郎氏が、はしがきの末尾に述べられた感懐で、生前くちなしの花を愛した思出がこめられている。遺稿の題名が、この事情から出ていることも容易にうなづかれる。

戦局いよいよ激烈の様相を呈し、祖国の運命が危急に面した時、安穏の勉学は許されなかった。戦争の是非を批判する餘地もなかった。国家の至上命令は、好むと、好まざるとを問わず、学徒をして、学園の生活を放棄させ、凄惨な戦線に起たせたのである。

「私は決して思い上った終身的な、好戦的な愛国主義に陥っているわけでも何でもない。在学当時、私の心に育んだ尊国の理智を、愛国の情にかえたまでのことである。」

学徒兵の手記としてまとめられた「同期の桜」に見られる若き知識人の感懐と同様に、彼も敬しい軍務の間に、思索している。生死の関頭に立つ若き生命が、切々と天来する苦悩をつづっている。

然し、機密保持の名のもとに、通信書簡の検閲は厳しい。手記といえども、思想心情の監察の意もあめて、上司の監督の目は光っている。学徒兵一般の書簡も手記も、これを意識して書かれたものが多く、必ずしも真情は率直に吐露されていない。修飾もされ、時には心境を反対に表現したものもあろう。

この遺稿を通じて、特に感銘深い点は、応召中亡くなった母えの思慕である。母えの限りなき愛情である。

「何を回顧し、何を追想しても、私の頭から母は離れない。母、母、母、いつになっても、何をしていても、子供に一番大切なものは母である。」

素封家であり、交通会社の社長でもある父のもとの母は、静かに坐っている姿を見たことがない。農村に育った母が、忙しい都会の家に嫁して、「お前達の幸福のため、うれしく思っている。ただ、私や、徳和や、節世や、数江達は、少し年をとっているばかりに、貞節とか操守とかという言葉と、その意味を知っているため、お前達のように本当に心から新しいお母様を慕うことはできないだろうことを残念に思う。」と述べている。

家事のために、弟たちの養育のために、父の再婚を肯定している。現実の問題が、新しい母を迎える必要を認めさせてはいるが、亡き母を追慕する純粋な気持の一面は、貞節操守の文字をあげて、父の再婚を批判したくなっている。この矛盾した心の動きが、明日の生命の知れぬ境地にあって、彼を強く捉えていた。

「私にはやはり昔のお母様が忘れられない。」これが胸底に宿る純愛の結論と見られる。学徒兵でなくても、人の子の至情であろう。

母の愛は神の愛である。いかに時代が変っても、母の愛はいつまでも神の愛である。母の好きな花を愛して、綿々とつづられた黒慕の情もまた神であろう。この心が現代の青年学徒の生活の中にも、生きつづけているなら、国家民族の平和願求の苦悩も終ることはなかろう。それでよいと思う。

たのであろう。

戦場に敵弾を浴びて倒れ、死期迫る時、かすかに動いた唇が「お母さん」と言。若い兵士の断末魔、最も愛する人、母を呼んだ光景を知っている。彼もまた死の直前まで、母を思い、母を呼んで、敢って行ったことだろう。

母を愛し、幼い弟たちを愛する。その愛する人たちの平和のために、自分は苦しみを越えて死ねるのだ。とも書いている。身辺の人たちえの愛情が、国家えの大きな愛にひろがる、とも語っている。

この母えの思慕が、父の再婚問題について、新しい悩みを彼に与えた。幼い弟たちを対象にして、「お前達にも五月になれば、新しいお母様がこられるだろう。一番母の愛情を必要とする年頃なのだから、私もお前達の幸福のため、うれしく思っている。ただ、私や、徳和や、節世や、数江達は、少し年をとっているばかりに、貞節とか操守とかという言葉と、その意味を知っているため、お前達のように本当に心か

ユネスコ一行六十名が来社
――高宮、宝物館を拝観――

日本に現存する古代祭場と、祭祀遺品（まつりの際に奉げられた品々）を拝観する為、去る九月二十六日、ユネスコ（国際連合教育科学文化機関）の一行六十名が宗像大社を訪れた。

神門前でバスを降りた一行は、二班に分れて宝物館と高宮祭場をそれぞれ拝観した。

宝物館では、九大鏡山教授が説明に当り、高宮祭場では当社職員が概観を説明した。

一行の殆どが日本語に堪能で、質問も神道の核心をつく鋭いものであった。

「宗像大社に参られて、どのように感じられますか？」との質問に対して、オランダからの一学者は、「非常に静かな雰囲気で、この雰囲気が宗教を育てる要素だと思います。」と語ったのが印象的であった。

御会席御希望の方は、表千家同席会までお申込み下さい。

なを、当日の副席券は発売いたしませんので御了承下さい。

（昨年の会記）

献詠歌会からのお知らせ
――教養講座は十一月に――

宗像大社教養講座歌会の第二回兼題「青葉」について各位から詠草をお寄せ頂きました。

ここに厚く御礼申上げます。

第二回は九月に開催する予定でしたが、残暑厳しく、又十月は大社の諸行事が続いていますので、十一月に延期させていただきます。

尚、献詠歌会は毎月二十日までに到着するようお願いします。

阿蒙少言

台風一過で荒れた畑に、残る秋なすこの三つ「秋なすは嫁に食わすな」の俚諺ともかるた歌ともつかぬ一句が浮ぶ。秋なすはうまいもの、こんなうまいなすを、にくい嫁には食べさせぬとする姑根性と、解する向きと反対に、アクが強いから姙娠の嫁の身に障りがあってはならぬと、案ずるあまりに食べさせぬ姑の愛情。解釈を二様にきくが、後者の愛情で秋なすを見たい。○煮ても焼いても食えぬ人物を、金魚のような男とかけ口するのを聞いているが、近頃大阪で金魚料理がはじまり、やがて名物にもなろうとのこと。煮ても焼いても食える金魚のような男では、悪口にはならない。料理も亦日進月歩、一節なわではゆかなくなった。○日本料理に欠かせぬやく味、ワサビは化学製品が使われ、これが人体に悪いとしきりに気にする人がある。にぎり寿司の妙味はいたづけなくなる。有害だ病因だとセンサクがゆきとゞけば、水も飲めなくなり、空気も吸えなくなる。ほどゝに食って飲んで、生命を持つ外ない。○何事によらず神経質になり過ぎると、家庭生活に悲劇を起す場合がある。「かんしゃくを起して妻が投げし時計またこちゝときさむ寂さ」は、恩師と共に旅行した時、宿で示された一首。四満とぼかり思っていた恩師の家庭も、ヒスの奥さんが悩みの種とわかって、驚きも同情もしたことがある。哲人ソクラテスでさえ、ヒスの奥さんに苦しんだ伝説がある。ほがらかな女性がよいにきまっている。○「草木や小鳥を愛する人に悪い人はありませんよ」と、或る造園会社の社長に語ったら、無言の笑いでこれを肯定した。すきの原、虫の声、澄み わたる空、豊かな情趣を大自然の秋が人心にめぐんでくれよう。

（白雲）

第七十六回　宗像大社献詠歌会詠草
九月二十日　於社務所詠草到着順

久留米　篠田太郎坊
庭の陽光しっと動かぬ昼下り蝉も耐ゆるか声をいそめぬ

勝浦　永島　計七
台風は北へ去りたりこの朝げ玄海灘に余波をのこして

遠賀　長畑　房江
夏の朝我の心を流ふ如くはげしき雨の音となりたり

勝浦　永島　桂翁
囃い太鼓い扇なと壇に供へ在りし日志のひ吾も一曲

宮田　片山　朔子
足の痛み鈍くつゞきて耐ゆるときに咲き究まりし黄バラ散りたり

大井　吉田　和子
つくゝゝと雨なき日々の続くかな艶なき茄子をもゞは悲しも

津屋崎　占部　由久
沖の辺はこの残らじ漁舟の入江を出ればひかりつゝ航く

コロラド　浦野　薫
阪で金魚料理がはじまり、やがて口するのを聞いているが、近頃大名物にもなろうとのこと。煮ても焼いても食える金魚のような男では、悪口にはならない。料理も亦日進月歩、一節なわではゆかなくなった。○日本料理に欠かせぬやく味、ワサビは化学製品が使われ、これが人体に悪いとしきりに気にする人がある。にぎり寿司の妙味はいたづけなくなる。有害だ病因だとセンサクがゆきとゞけば、水も飲めなくなり、空気も吸えなくなる。ほどゝに食って飲んで、生命を持つ外ない。○何事によらず神経質になり過ぎると、家庭生活に悲劇を起す場合がある。「かんしゃくを起して妻が投げし時計またこちゝときさむ寂さ」は、恩師と共に旅行した時、宿で示された一首。四満とぼかり思っていた恩師の家庭も、ヒスの奥さんが悩みの種とわかって、驚きも同情もしたことがある。哲人ソクラテスでさえ、ヒスの奥さんに苦しんだ伝説がある。ほがらかな女性がよいにきまっている。○「草木や小鳥を愛する人に悪い人はありませんよ」と、或る造園会社の社長に語ったら、無言の笑いでこれを肯定した。すきの原、虫の声、澄み わたる空、豊かな情趣を大自然の秋が人心にめぐんでくれよう。

（白雲）

久方に孫のおとづれ驚ろけりおほきく育ちて見忘れにけり

吉武　原田　松代
追剥のおそし帳は都市となり阜やレストランの紅き灯つく

吉武　原田　リノ
明朝を待ちて出で来し宿の庭河鹿の鳴くが遠く聞ゆる

福間　松尾　豊
外出の吾を見つけて野繋ぎの山羊が啼きつゝかなた寄せ来る

福岡　江崎　琴子
庭の面になくうろぎの声かなしものおもへとも秋はさびしき

香椎　楼井　ツ子
一夏（いちげ）近くけふの想ひに泌むものかつくく法師今のかぎりを

大井　安部　重郎
寒涼のふるさと山を分け行けば真葛の花の散りなりけり

武丸　立石ろせ
上野燈賞ふあてもなく友と来てこの山里に一日過しぬ

東郷　藤崎　辰子
暮れなずむ庭に佇おれば吾が胸に蟬まいきて声高く啼く

大井　村山　幸生
待ちかねし雨にぬれつゝ揚水機かたつくる心晴れやかにして

大井　木原ふさ子
峡の畑胡麻引き居れば真昼なほ虫の音すぢそき秋は来にけり

田熊　小野角次郎
牧舎守る牡草はむに少くて尚も欲る声長く響けり

田熊　小野　花居
夜毎々々庭草むらに鳴く虫の広さをなせり昨日より今日

徳重　石松や寸子
里人の心をこめて改めし宮居に祭る三柱の神

深田　中野　節子
百日紅浜木綿咲きしを無口なる夫に語りて朝の厨に立つ

沖ノ島　佐藤市五郎
すこやかに神の乳房を両手に握りすべて忘れて祈り縋むる

宗像　土性　トヨ
月々の傾り懐し宗像は皆綴ぢ合せて繰り返えし縋む

福間　森　八蔵
真手樫の茂げれる塚に蜩の鳴くや寂して暮るゝ秋の日

陵厳寺　真鍋　万三
久留米　篠田太郎坊
庭の陽光しっと動かぬ昼下り蝉も耐ゆるか声をいそめぬ

勝浦　永島　計七
台風は北へ去りたりこの朝げ玄海灘に余波をのこして

遠賀　長畑　房江
夏の朝我の心を流ふ如くはげしき雨の音となりたり

勝浦　永島　桂翁
囃い太鼓い扇なと壇に供へ在りし日志のひ吾も一曲

宮田　片山　朔子
足の痛み鈍くつゞきて耐ゆるときに咲き究まりし黄バラ散りたり

大井　吉田　和子
つくゝゝと雨なき日々の続くかな艶なき茄子をもゞは悲しも

津屋崎　占部　由久
沖の辺はこの残らじ漁舟の入江を出ればひかりつゝ航く

コロラド　浦野　薫
阪で金魚料理がはじまり、やがて名物にもなろうとのこと。煮ても焼いても食える金魚のような男では、悪口にはならない。料理も亦日進月歩、一節なわではゆかなくなった。○日本料理に欠かせぬやく味、ワサビは化学製品が使われ、これが人体に悪いとしきりに気にする人がある。にぎり寿司の妙味はいたづけなくなる。有害だ病因だとセンサクがゆきとゞけば、水も飲めなくなり、空気も吸えなくなる。ほどゝに食って飲んで、生命を持つ外ない。○何事によらず神経質になり過ぎると、家庭生活に悲劇を起す場合がある。「かんしゃくを起して妻が投げし時計またこちゝときさむ寂さ」は、恩師と共に旅行した時、宿で示された一首。四満とぼかり思っていた恩師の家庭も、ヒスの奥さんが悩みの種とわかって、驚きも同情もしたことがある。哲人ソクラテスでさえ、ヒスの奥さんに苦しんだ伝説がある。ほがらかな女性がよいにきまっている。○「草木や小鳥を愛する人に悪い人はありませんよ」と、或る造園会社の社長に語ったら、無言の笑いでこれを肯定した。すきの原、虫の声、澄み わたる空、豊かな情趣を大自然の秋が人心にめぐんでくれよう。

（白雲）

新らしき木の香漂ゝ家に在る友とちの顔晴れて明るき

津屋崎　麦野　時雄
満開せる孔雀の尾羽ゆたかなり黄金色に眩しくかがやく

宗像　八波　五月
理はあれど胸におさめて帰り来ぬ悔いなく生きる年輪となれ

田熊　鷲頭かつ代
背損の患者の作るビニール鶴強くて長き脚に直立す

戸畑　田中　桂一
発育のおくれし孫をことさらに汗にじむ青をかがめ見ひけり

戸畑　田中ハツセ
宮田　北原　君子
コロラド　浦野　薫
阪で金魚料理がはじまり、やがて名物にもなろうとのこと。煮ても焼いても食える金魚のような男では、悪口にはならない。料理も亦日進月歩、一節なわではゆかなくなった。○日本料理に欠かせぬやく味、ワサビは化学製品が使われ、これが人体に悪いとしきりに気にする人がある。にぎり寿司の妙味はいたづけなくなる。有害だ病因だとセンサクがゆきとゞけば、水も飲めなくなり、空気も吸えなくなる。ほどゝに食って飲んで、生命を持つ外ない。○何事によらず神経質になり過ぎると、家庭生活に悲劇を起す場合がある。「かんしゃくを起して妻が投げし時計またこちゝときさむ寂さ」は、恩師と共に旅行した時、宿で示された一首。四満とぼかり思っていた恩師の家庭も、ヒスの奥さんが悩みの種とわかって、驚きも同情もしたことがある。哲人ソクラテスでさえ、ヒスの奥さんに苦しんだ伝説がある。ほがらかな女性がよいにきまっている。○「草木や小鳥を愛する人に悪い人はありませんよ」と、或る造園会社の社長に語ったら、無言の笑いでこれを肯定した。すきの原、虫の声、澄み わたる空、豊かな情趣を大自然の秋が人心にめぐんでくれよう。

（白雲）

夕食後のひと時、突然うら庭に飛び込んだは、屈前に釣竿持って勝れた剣道教師。

「先生、今日は釣れた釣れた、証明書を書いて下さい」

見ればヒクは重そうである。いつも夕方がつかり疲れて立寄り、この頃の小魚は、思想が悪いとか、礼儀を知らぬとか、勝手な不満をぶちまけて、結局近所の漁協に相談してやって獲た？何匹かをみやげに引揚げてゆく剣道氏、馬鹿にさげんがいい。

「この魚、平素の成績に似ず、大漁ですね、まさに、本人の釣り上げたものに相違ありません。奥さんを喜ばせたい一念の努力と、驚くべき研究心から出来た技術の向上と認めます、と書いても奥さんが信用するかな」

釣れぬ不成績に、帰途一杯を重ねて魚屋の売れ残りを買って、奥さんをだました前科も少くない。ある時、酔っ払って氷のついた魚を自慢そうに持ち帰って以来、信用極めてうすくなった。カンニングも一度ばれると、剣のベテランも、狼の襲来を叫んで農夫をだました小僧の童話の域を、ぬけ出すこと容易でない。

ひようたんから出た駒は、始末に困る。ひょうたんなどから駒を呼び出さない方が面倒な手数もかからず、無難である。

自家の四男坊も、今は扱いにくい高校侍に成長しているが、彼が幼稚園の頃、兄たちにならって、近くの川に釣竿かついで行ったれて、母親を悲わした。皆が小指の先ほどの鯉のお裾分けにあずかって、四男坊の得意顔を笑った一幕は、今もわが家の珍重すべきドラマ脚本となっている。

幼稚園が、びっくりアワを食った顔、鯉の方も水面から顔を出した瞬間、竿の主の幼稚園に驚いただろう。

兄たちのあげ得ない殊勲の戦果は、料理してくれと莊文をつけられて、母親を悲わした。皆が小指の先ほどの鯉のお裾分けにあずかって、四男坊の得意顔を笑った一幕は、今もわが家の珍重すべきドラマ脚本となっている。

奇跡に似た解説難いことなど、人間の生活に数多いものでは ない。でも時たま、ひょうたんの駒にたとえるほどの珍現象が起る。それが困惑や、和楽を生む。ひょうたんの駒は狙ってはならない。釣りなどの趣味、娯楽は、駒が出い。」

「天下の難関とされる試験に抜わないが、驚望に原られて飛び出した駒は、人間をひきする危険がある。

「父を尾行する高校生。と題する家庭を不幸にする駒の暴走。

「父を尾行する高校生。と題すれば既に悲劇をはらんでいる話と受取れよう。愛情深い母の喫茶を見かねた高校生が、父の不貞乱行話が難しくなった。らくだが針の穴を通っては、大変だから、魚釣りの証明書にもどって、結びとしよう。

「随分鼻いきの荒い主人も、小魚は思うように言うことをきいてくれません。ビクをあけたら氷のついた魚が出て、毎度こんなことだろうと思っていました。朝出かける時、魚屋さんにいつも頼んでいたのかも知れません。でも時折は証明書のいる思想良好の魚も釣ったことがあるわけで。」

奥さんの後日物語がこれ。海辺での剣道氏の脚前はよくないが、家庭での大刀さばきも奥さんの方が、上だと読んでいる。

——狸住庵茶話——

宗像談話室　ひょうたんから出る駒

十月のまつり

一二日　秋季大祭

当社の大きな祭りの一つ。一日早朝、沖・中両宮の神様を大島より御座船にお載せし、漁船数百隻がお供して神湊までお送りする。

神湊では、辺津宮の神様がお出迎えになり、神湊から三宮お揃いの上辺津宮にお入りになり、秋季大祭第一日祭を斎行する。二、三日は午前十時に祭典が始められる。

一二日　的原神社祭

宗像町八並に鎮座される旧郷社的原神社秋祭り。当社から職員が祭典に参列する。

一五日　献茶祭　午前十一時

茶道表千家家元即中斎千宗左宗匠による献茶が行われる。

一七日　沖・中両宮
一八日　秋季大祭

大島の中津宮に於て行われる。先ず遥拝所に於て、沖津宮遥拝が行われ、この後沖・中両宮の大祭が斎行される。

今月の言葉

心は神明の舎、而して神は聡明正直にして壱なる者なり。

——林羅山文集より——

人の心は神のやどれるところであり、神に詣でる時は常に清浄を旨とせねばならぬ。その時にこそ神は聡明にして正直な判断を下される。

自動車の運転も同じ。

我が脚と拔術に過信せず、敬虔な神のやどれる心で、ハンドルを握っていただきたい。

年々増加する結婚式

華燭の申込み続々……

（宗像大社結婚式場）

結婚式のシーズンがやって来た。宗像郡は福岡と、北九州の中間地点で、緑の住宅地として、近年脚光を浴び、郡内のベットタウン化は急テンポで進んでいる。

この為か、当社の挙式数も年々増加の一途を辿っている。

当社ではシーズンを控えて、申込が多く、係は毎日挙式申込者の応接に暇のない程である。

昨年は「丙午」（ヒノエウマ）とあって申込も控えめであったが、本年は非常に多いようである。

昨年度から新しく神湊の旅館の協賛によって、旅館での結婚式を開設した。

これは挙式者各位の便宜をはかり、同一建物の中で挙式、記念撮影、披露宴と一連の行事が出来るようにとの意味からで、当社清明殿は挙式だけで、披露宴は多く出来ない現状にかんがみ、この打開策として始められたものである。新殿された神湊の旅館結婚式は玄昇殿に望と明媚な環境と新鮮な生魚料理とが人気を呼び申込みが多くなっている。

亦これに加えて、国道三号線の赤間にある福岡モーテルでも行うようになった。

今後、式場を設ける旅館が多く、出張結婚式は多くなる模様である。

挙式されたカップルには、久保宮司の筆になる表札を贈呈している。この表札も既に一千枚を数えている。

又、赤ちゃん誕生の際には命名を行っており、命名の由縁を記した命名書を差し上げている。

この命名には、久保宮司が一晩お籠りの上、神意を伺って命名することになっている。

先日の新聞に結婚式の種別について調査報告が出ていたが、それによると、挙式の中で神前、教会仏前、公民館など種々ある中で、神道による神前結婚式が全体の八二パーセントをしめていると報道されていた。この結果からして、やはり、日本人の結婚式は神道による挙式の伝統を重んじていることが窺える。

「親負い人形」出来る

〃武丸の正助さんの姿を再現〃

「武丸の正助さん」で有名な孝子正助翁の姿を博多人形で表現し、広く翁の遺徳を顕彰したい。この願いを聞いた博多人形師小島与一氏は、昔の資料や絵をもとに正助さんを一カ月がかりで作り上げた。

この「親負い人形」の贈呈式は昨年十一月、正助廟で行われたが関係者多数の要望があって、これを原型として更に五十体を復製する事になり、去る九月末日完成、内二体が当大社に寄贈された。

正助さんは、寛文十一年（AD一六七一）筑前国武丸村（現宗像郡宗像町武丸）に生れた。元禄四年、二十二才の時、奉公をやめて帰り、家業に精を出した。

元禄七年、酒飲みの父正三郎が中風の病に倒れ、これから正助のなみだぐましい孝養が始まった。宝永七年四十才の時、郡役人から米十二俵田一反七畝をいただく。この後、黒出藩は幾度か、其の徳行を表彰し、祖税の免除を与えたが、固辞して受けなかったと云う。これらの徳行の物語りは余りにも有名である。

人形は若い日の正助さんが年老いた中風の父親を背負い、いたわっている姿のもので、小島与一氏は「時代感を出す為、材料も焼きも色づけも、明治時代の方法をとり、服装や、人相などは現存する〃親孝行者〃数人の人相をモデルにした。」と語っている。

宝物館前庭に国旗掲揚塔

——神湊中山勝氏奉納——

十月一日の秋季大祭を前に、国旗掲揚塔が奉納された。

奉納者は神湊で食料品店を経営される中山勝、智照氏父子で、同氏は当宮の崇敬篤く月次の神饌を初め神前のお供物は、ほとんど同店から調達されている。

このたび奉納された国旗掲揚塔は宗像大社宝物館前既入口に作られ、台座の径が約三メートル、ポールの長さが約十五メートルありされる中山勝氏父子の、純白のポールがひときわ美しく立っている。

十月一日の大祭初日に奉納を記念して五尺四方の大日章旗が掲げられることになった。

社務日誌抄

九月一日　勅祭請願祈願祭斎行。復興計画用地についての打合せ会開かる。

二日　海洋神事奉賛会打合会開催。

四日　出雲方面視察旅行第三班出発す。

五日　五月宮土地拡張についての懇談会開催。

九日　地ノ島漁協地鎮祭。

一〇日　神湊旅館結婚式に職員出張。

一一日　職員会議、十月の諸祭興について。出雲方面視察旅行第四班出発。宮司相談役力丸氏逝去。

一三日　海上渡御の件につき、職員二名海上保安庁へ出張。

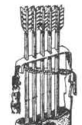
一五日　月次祭斎行。西鉄社長、栗組社長参拝。

一七日　沖津宮神饌奉遷の為、菅津権宮司始め、三名出航。読売新聞記者、ハミリ撮影の為、秋吉氏同乗。

宗像大社御用　綜合印刷
有限会社　大和印刷所
宗像郡宗像町東郷　電話　宗像局2027番　有線277－1

許斐の旗風

（其の十）



出陣（三）

草浦柴舟 作
福田長庵 画

こちらは立花城、昨日より博多の鎮西屋敷をひき払った大友近江守（具簡入道）、島津道鑑を初め千余名の軍勢がひしめいていた。

前夜より徹夜で空濠（からぼり）雑茂木（さかもぎ）に手を加え籠城の構築にとりかかっている。

と、その時一人の兵士が何をみつけたのか、とつぜん身をひるがえして内へ飛んでいった。

「尊氏殿の御勢らしきものが、許斐の旗印を先頭にして見えまする。」

「なに、尊氏殿が御着とある、早速お迎えにいでよ。」

大友具簡を初め城将たち数名が出迎えに立った。

「尊氏でござる。具簡殿か。」

「さよう具簡でござる」

「京では大事な御子息、貴藏をあえなき死に導きお詫びをする。」

「なんのなんの大功を現わした息子は孝行者でござる。」……と云いながらも老の目をうるませていた。

しかし、京に於て結城親光の刃傷にあい落命した貴藏の故郷だとは何の因縁であろうか。尊氏もこれ以上悔みの言葉がなかった。

「戦国の世にはありふれたことでござる。わが家のみの悲事でもござらぬ。これ以上の御心痛はかえっていたみいり申す」

と、逆に具簡が尊氏をいさめるのであった。

「処で尊氏殿、我々は菊池の軍勢をこの立花山にて迎撃つ所存でござるが。

昨夜来徹夜で籠城の準備を致し城将もみな作戦を練って居ります。」

「いや、それは如何なものでご座ろうか。

敵は三万に近い大軍と聞きおよぶ。まして二の地は守るに利あり、手前の丘陵線まで落ぶ。

決戦場は多々良ケ浜になるであろう。しかしこの浜辺も南は宮崎宮の海辺から北は香椎宮の海辺から北は香椎手前の丘陵線まで落ぶ。

沼田、砂原と余りにも広過ぎて双方対決の位置がつかみにくい。

それに尊氏一党、城にたてこもり居ると知れれば、他の諸党は益々菊池方へ助勢するのではあるまいか。

ここで守るか攻めるか、大きく意見が二分された。許斐三郎康氏は、はたと当惑した。宗像を出発する迄、守るなどとは少しも考えてはいない。しかし、立花一党も策を練り上げての結論だ。立花の城将達はみな康氏達に疑惑の眼をそそぎかけた。

これではどうしようにも、なすすべがない。遂に双方の軍事役が一郭の内で軍議を初めた。

攻める意見、守る意見、双方共々に一理ある。しかし、詳細に協議の結果、

「ここは九州でのわかれめ、いや天下のわかれめ、進んで戦う他はない。」

と結論が出された。

しかし、大友方もこの辺の地勢にあかるい。すでに昨夜来、大多数の兵力が博多に道入っている。これらの軍勢は刻々と北上しつつあるので、当方の軍勢も南下すればおそらく合戦の地は香椎と宮崎の中間地点になるだろうと観測された。

城内の軍勢は一斉に出発の準備を初めた。立花勢、宗像勢、その他、諸族雑多であるが総数からすれば菊池方の二倍に満たない。

この少数の軍勢でいかに菊池方の軍勢を迎え撃つか。

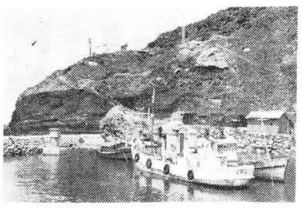
その対策は地形、風向、結果力を充分に利用する以外にはなかった。

（つづく）

沖ノ島さまお迎え

＝秋の大祭プロローグ始まる＝

秋の大祭を飾る西日本最大の行事「海上パレード」に先がけて、沖津宮さまお迎えの行事は、季節風の吹き荒ぶ九月十八日に行われ、沖津宮御神璽は滞りなく中津宮に遷御せられた。



この祭事は、辺津宮に沖、中、辺の三宮がお揃いになって初めて秋の大祭が執行される伝統にのっとり、大祭前に行われる行事である。

毎年九月中旬の海上の穏かな日を選んで行われて来たが、今年は台風二十六号の影響で、旬日に渡、玄界灘は北西風に荒れ続け、船影の一つだに見渡す事の出来ない気象状況であった。しかし、このまゝでは祭事に差支えるので、波浪をついて、九月十八日に決行された。

葦津権宮司、筌父祢宜、宗像権祢宜は、前夜より中津宮社務所に参籠潔斎して無事神迎えの出来る事を祈念した。

当日未明、奉仕船第三沖ノ島丸は神職・沖・中両宮奉賛会役員を乗せて膠雲たなびく大島を出航。海面は暗く、かなた上に明星がかすかにまたたく。

天気晴朗。しかし、海上を渡る北風は厳しい。大島を廻り、玄界灘に乗り出すと、大型の漁船も木葉のように揺れ動く。白波は容赦なく船上を洗い、国家鎮護の大幟は突風を受けて弓なりになった。遂に大幟は降され、触先の波切御幣は風に千切れ飛んだ。三時間半の苦闘の末、漸く沖ノ島に到着する事が出来た。

金貨衣類を脱いで、海水に浴する。この後、衣服を新しくして参道を進む沖ノ島原始林の樹海が時折大風に唱和する。神殿に進み、秋季大祭奏行に際して神遷りの儀滞りなく行われますように……葦津権宮司の祝詞が響渡る神域に響き渡った。

御神璽は厳かに依代に奉遷された。御神璽を奉戴しつつ島を降り、難工事と言われた沖ノ島避難港工事事務所に立寄り、直会を行った。

途中大波をかぶり、ロープで体を縛り、荒波の中で釣り上げたマビキに御神酒を戴き、十二時離島は大島に着御、大島村長以下出迎えの村民供奉の下に、中津宮本殿に奉斎された。

此の御神璽は十月一日、中津宮神璽と共に大島から海上を渡御される。宗像七浦の漁船数百隻が大島に集結、大船団を編成して巡幸勇壮な船絵巻が展開されるであろう。

写真　上沖ノ島漁港　下沖津宮一の鳥居

沖ノ島　沖津宮日誌から

八月一日　月次祭奉仕
大島漁船欽盛丸及上田勝利氏より獣肉あり。午後三時黒瀬組錦洋丸、黒瀬丸、起重機船、潜水用船石材運搬用船、コンプレッサー船等曳行、工員二十三名同乗来島。明年三月二十日竣施行の予定。直に工事着手の準備に入る。
夕刻吾智網船団四隻港内に入り夜西南方面に遠く多数の漁火を見る。
二　日
吾智網船早朝出漁、大島漁船欽盛丸外二隻港内に在り、午後〇時三十分、巡視船"よしの"来島。
八　日
午前十時、林組海幸丸西津武外三名来島作業準備。本年度骨材採取二、七〇〇立米の予定。十一月末迄との事である。
十二日
午後三時、巡視船よしの、沖ノ島到着。佐藤乗船帰省の途につき、久保宮司交代勤務に入る。
十三日
林組に本社より灯台に連絡あり、数名の残留者を指定し、他は夕刻盆休みの為引揚げる。
十五日
正午終戦記念日につき、黙祷、午後風強まり白浪立つ。
十九日　工事本日も続行。
二十二日
午後三時半巡視船わかちどり、沖ノ島に到着、久保宮司便乗離島、佐藤交替帰任。
久保宮司の残された歌あり。
佐藤翁の壮健を祝して
沖津宮をわらべの日より守る君
なほすこやかに仕へまつらせ
答歌
すこやかに仕へ奉れの御言葉に
こたへまつらむ心浄めて
二十三日　午後二時、沖津丸来島施設課古賀中尾来島。
二十四日　黒瀬組北海岸より捨石運搬。施設課員発電機修理作業
夕刻二十隻の漁船入港。
二十六日　早朝糸島郡岐志漁船富士丸、日出丸献魚参拝。
二十七日　玄海町鎮守第八幸丸海幸丸献魚参拝。

宗像の城　城址を訪ねて (一)

今回より宗像郡内の城址を訪ねてみよう。

現在宗像郡内に城址と呼ばれる地は、許斐岳の許斐城址をはじめとして、二十二カ所がある。

これ等の城址は、現在みる小倉城のごとき江戸時代以前のものとはちがい、地形や、地理を利用したとりでか、邸宅状の中世時代の館（やかた）のごときものである。

又今日では、その全てが城の姿を止めず、あるものは崩れしまゝの石垣のみを見、又草木の繁る山上の広場で、古老の語り草に聞かれる城址、さらには、田畑と化し、誰にも忘れられた薮となっているものさえある。

これ等の城址は、中世乱麻の戦国時代に宗像神社を中心とし挙郡結束し、外敵の侵攻を防ぎ、時には勝関を又ある時は敗走し乍らも、神郡宗像の地を守り抜いた先祖の古戦場である。

郡内の城の大半は、中世宗像の歴史から必然的に生れたものである。周知の如く平安時代末期の日本は、源平二氏の抗争が続き、寿永三年（一一八四）頼朝に平家追討の院宣が下され、やがて平氏は壇ノ浦に滅亡するに至る。ここに頼朝は、御家人を守護地頭として全国に補任し、封建体制を樹立した。九州には鎮西奉行が置かれ、当然宗像の地へも地頭職が任ぜらるべきであった。しかし頼朝は八条院の「仰」によって、特に神郡宗像に地頭職設置を差止めると共に、時の第二十八代大宮司氏実を「重代人」とした。

これは大宮司氏実が、皇室を本家と仰いで祭祀に奉仕する神官であると同時に、源氏の御家人の列に加わり武家機成の一員として、領主権と検断権とを併せ有する在地の領主となったことを意味する。

この時代と前後して、宗像一族は、宗像大宮司を主として武士的な風潮を帯びて来ると共に、一族の勢力増大の為に、一族郎党を率いて武技を練り、兵馬のことにも関与せざるを得なくなり、多くの城を築くこととなってくるのであった。

（つづく）

宮司相談役　力丸市尾氏逝去さる

宮司相談役として永年大社の為に尽力された力丸市尾氏が去る九月十一日逝去された。

未だ白風奈波が氏の逝去を悼むかのように小雨が俨の翌十二日、自宅に於て厳かに告別式が行われた。

氏は宗像人特有の質実剛健な気風を継ぎ、晩年は温厚な為人であった。享年八十二才であった。

青年の頃より早くも人望あつく三十五才にして宗像大社の氏子惣代となられ、校区民の熱望におされ一時惣代を辞され、区長・田島校区耕地整理組合長・農業協同組合長と数年に亘り区、村の為に活躍され再度、氏子惣代となられた。

特に大東亜戦争、戦後と非常に困難な時代に氏子の教化活動に尽力された。其の間、大社復興事業々の事蹟がのこって居る。降って現久保宮司就任より宮司相談役となられ、宝物館の建設、境内外地の整備等と尽瘁された氏の功績は実に顕著なものがある。

又、氏は三男四女の子宝に恵まれ子女は他家に嫁し幸福な家庭を営まれている。氏は教育に非常な力を入れられ、それ〴〵最高の学府を子させ、長男義雄氏は家業を継がれ、二、三男それ〴〵社会的に重要なる役職につかれ、日立造船因島工場部長、又西日本鉄道株式会社並に日田バス常務、日田タクシー社長等要職にあり活躍されている。氏の努力が実り郡養望の御一家である。

今は亡き氏の御霊の前に永年尽された業績に感謝すると共に、心より御冥福をお祈りする次第である。

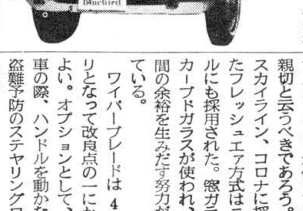
話題の新車をみる (十五)

ニューブルーバードの巻

従来通りは五、〇〇〇回転から六、〇〇〇回転となった。足廻りも変更され四輪独立懸架となった。後輪駆動は如何して？プリンスのド・テオンアクスルの採用等と考える向があるかもしれない。わかりやすく言えば、キャロル方式である。

にしたのが燃費で18・5Kをそのまゝに残している。

ニューブルが、経済性をそのまゝに性能をより向上させようとすれば、軽量化とエンジンの効率化を計るより方法はない。かくてOHC（オーバーヘッドカムシャフト）の採用、回転数の上昇となる。旧ブルのオーソドックスタイプを改め、オーバスケアタイプに変更（シリンダー内径×行程＝83×59・9㎜）され、回転数は勝関を又ある時は敗走し乍らも、神郡宗像の地を守り抜いた



タ、カローラの前輪懸架方式と同じだと考えて良い。

さて、室内に目を向けよう。ニューブルは三角窓がない。今流行の欧州車モード輸入の国産一号という所だ。運転席に座って窓を下げると、ハードトップの感じがする。特に二ドア車ではこの感が強い。メーターはサニー方式で横長く左端に時計がセットされる。

特にスタンダードタイプにもトリプルカウンターが付けてあるのは見て、もう少しなんとかならないものだろうかと思われる。しかし親切と云うべきであろう。

スカイライン、コロナに採用されたフレッシュエア方式はニューブルにも採用された。窓ガラスにはカーブドガラスが使われ、室内空間の余裕を生みだす努力がなされている。

ワイパーブレードは400ミリとなって改良点の一にかかげてよい。オプションとして、路上駐車の際、ハンドルを動かなくする盗難予防のステヤリングロックがある。

又410型から廃止された夜間エンジン点検用ランプが復元したのも良い。

さて、カタログによれば、0－400mまで20秒としているが、国産一、〇〇〇cc級が全べて20秒を割っている現実から見ても、もう少しなんとかならないものだろうかと思われる。しかし72馬力にしてこの程度におさめた事は、軽量化だけを追わず、実用性と、耐久性を織り込んだものとして高く評価されて良いだろう。

全般的にオーソドックスなスタイルでまとめ、クッションが固いとなって評価される。

評が「ニューブルの誕生によって拭払される事であろう。

福岡店頭渡価格

二ドア	SD	五四万一千円
四ドア	SD	五八万一千円
二ドア	DX	六二万一千円
四ドア	DX	六六万一千円

便り

前略　陳者本月十五日当部落老人会一同御社参詣の際、参道鳥居と手洗場中間茶屋横にて「センダン」の葉にたた「サヤ豆」のなった誠にめずらしい木を見て色々とりざたしましたが、一向に本当の名称がわかりません。御多用中御手数ですが、其の木に関しわかるだけ御知せ願れば幸甚に存します。

小倉区　米谷　治一

回答

前略　陳内のお尋ねの木につき、お知らせ致します。

サイカチ（カワラケツメイ科）人家に植えられるが、また川原などに自生する高木で、幹や枝に分枝した大きな刺がある。葉は普通は長枝のものは二回羽状、短枝のものは一回状でつやがある。

小枝は長さ一－四センチで、葉脚の左右が不同となり、花は夏に咲く。雌雄雑居花でふつうは四数性花の外面は多毛、花径七センチ位で黄緑色、おしべは八本。実は幅二五センチ位で、ひらたく曲る。

昔は物を洗うのにこの実を使った名は四梅子（さいかいし、この木の古名）のなまったもの。

宗像伝説　其の七十五

続　瑠璃碗異聞

異例のことに仰天した役人の前に侍臣が近づき、一行を玉座の近くまで導いた。

目を上げた役人は帝の側にはべる女人を見て驚愕した。かっての胡地における碧眼の女人を！悲痛な哀身を出び彼は瑠璃碗を高く差し出した。この女人が西の隊商から後宮に献せられ、彼女の口から瑠璃碗が都の噂になっていたのを役人が知ったのは数刻の喪神の後であった。

この日より瑠璃碗は漢朝の珍宝として常に帝のかたわらにあった。各国より来朝する朝貢使等は、この神秘なる碧眼見るのみであったが、一度その青緑の光りを目にした者は帰国の報告と共に、この神秘輝きについて語るのを忘れなかった。かくして瑠璃碗は古代東洋諸国にまたたく中に伝わった。

ある年、未曾有の旱魃が中国大陸を襲った。

春から夏の間、太陽は白熱の光を燃し続け、熱風は野を焼き河を干上らした。巷には死者が満ち人々は非情な天を呪った。群臣は相議って帝に蛟竜への祈りをこうた。直ちに黄河のほとりに祭壇を設け壇上には犠牲の羊と共に清冽な水を満たせた瑠璃碗を供えた。長い祈りが終り帝は羊を屠り、碗を捧げもち岸辺に立ち天を仰ぎ水を黄河に注いだ。一掬の水は白く千割れた河床にしみこんだ。その夜雷鳴が轟き雨は沛然と降った。万物は蘇えり、黄河は満々と水を湛えた。翌朝、出御した帝は玉座のあたりに砕け散った瑠璃碗を見て慨然とした。そこへ碧眼の女人の急死を告げる報らせがもたらされた。驚考した帝は、これは凡て蛟竜の欲した所以であると考え、黄河の河畔に女人を祭る廟宇を建て、瑠璃碗の破片は、救国の宝として保存した。

この事件は又、各国の朝貢使等によって広く伝えられた。当時、新羅と抗争中にあった百済王は殊に興味をもち、救国の護符として、その一片を下賜たまわるよう切望し、多大の財宝を献じた。その願いは漢帝の聴許するところとなり、瑠璃碗の一片は東へ進んだ。

百済の瑠璃碗破片の平和は少かった。新羅が強大化するにつれ圧迫を受けた百済は救援を日本に求めた。欽明朝開戊年、日本は、兵千人、馬百疋、船四十隻を贈り救援軍を派遣したが、時に戦利あらず、百済の聖明王は戦死し皇子は玉璽と救国の護符である瑠璃碗の残片を手にして日本へ脱出のため山野を彷徨した。ともすれば挫けそうになる若い皇子の心は、青く輝くガラスの破片を見る度に勇気づけられた。月下の山中で、白日の海浜で危難にあう度に皇子は瑠璃碗に祈った。その験の故か、翌乙亥年、皇子は日本に上陸し明朝の戦死を大和朝廷に報告し帰国にあたり御使命とする旨を告げた。皇子は一年間日本にあって再び決意を新に帰国の途についた。帰国にあたり御使命とする旨を告げた。皇子は一年間日本にあって再び決意を新に帰国の途についた。帰国にあたり御使命とする旨を告げた。皇子は瑠璃碗残片を戦乱の故国に持ち帰るのをためらった。願くは、この平和な島国にとどめおきその姿のまま永遠に保たれるのを願った。その事を天皇に奏上し、願のかなえられる事を知るや彼は勇躍して出発した。

百済皇子より託された瑠璃碗残片を如何にするかが朝議になる毎に天皇は、皇子の凛の顔を想い浮べた。和の考論議の末、海北道中に奇き祀る宗像大神に奉献せられることに決定した時、天皇はこの瑠璃碗にまつわる救国の伝説からして国家鎮護を使命とする神社の一つに奉納し給う所と思はれた。

勅使が玄海の波涛を掃し渡り沖之島に鎮り座す神に遥く捧げ終えた時、白虹が天を貫いたと言う。

×　×　×

宗像大社献詠 俳句作品集 (五十六)

津屋崎　白石百合蔵

はや秋か木に貼るビラを風鳴らす

大井　吉田　和子

茄子の紺あせて阜の畑かなし

大井　吉田　杏子

木下蔭縫うてしみ蝶の昼

大井　木原　房子

岩礁の澪に透く入日はや秋に

大井　安部　重郎

しきたりは亡母の如くに盆祭

久留米　篠田太郎坊

表面張力に引かれつゝ逃ぐ自高かな

津屋崎　毛利　夜潮

宮様の御立ち石とや蝉時雨

津屋崎　久羽　文王

漁火の灯れば沈む蝉の声

津屋崎　井浦　良介

蹙撫の果海のがれ来し十三夜

津屋崎　勝田　光一

野心も秋へ雲美しく流れ過ぎ

津屋崎　鶴　賀水

いちまいの海へ落暉が漁火残し

津屋崎　占部　河童

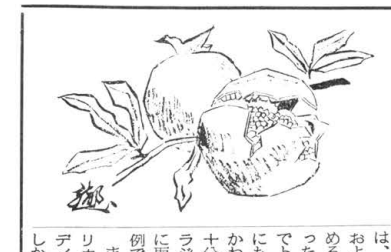
老松の翳りや月の出を待つ一人

田熊　小野角次郎

一日の栄華花しぼむ酔芙蓉

田熊　小野　花居

冴え渡る今宵端居に居待月



出光佐三一問一答シリーズ ⑭

マルクスが日本に生まれていたら

たとえば、われわれの石油業界でも、外国の会社は非常にたくさんの人を拠しながら力が弱い。現在の日本の普通の石油会社は、外国と日本との合の子だから、外国の会社よりはやはり人数が少なくて強い。出光は純日本的な行き方だから、非常に人数が少なくて、しかも非常に団結力が強い。

過去において、この出光の少数精鋭主義が極端に発揮されたのは、君たちも知っているように戦時中だ。戦時中、軍が戦時統制をやったが、法律と組織と規則をつくって、人間はただそこに並べておけばよい。人間の経験とか、心のあり方などは無視する、という行き方をとったんだ。当時、満州・北支・中支の三地方は、石油の配給量は大体同じであったが、まず満州は、従来、出光が単独で石油配給をやって、少しも不都合はなかったのに、当局は専売制をとったため、大組織・大人数を要し、屋上屋を架す無駄をやった。北支では、各種の委員会とか、共同販売会社が出来て、二百人もの人数が配置された。ところが中支では、出光にまかされたため、上の統制業務は出光から二人、役人から二人、合計三人で、簡単にやってのけた。

アメリカの電子工業界は、一般のラジオの市場において、日本のメーカーのためにその売上げの約五十六%を失なった。というのは、いままで真空管式のラジオ、およびその真空管を引き締めるということが非常に困難であったからである。すでにアメリカでトランジスタは開発されていたにもかかわらず、真空管のほうがかわいいために、トランジスタを十分に伸ばさないで、そのためにラジオの市場の大きな部分を日本に取られてしまったというよい実例である。

また相当昔の話であるが、アメリカの機関車製造業者は、すでにディーゼル機関車を開発していたトランジスタは開発されていたにもかかわらず、真空管のほうがかわいいために、トランジスタを十分に伸ばさないで、そのためにラジオの市場の大きな部分を日本に取られてしまったというよい実例である。

また相当昔の話であるが、アメリカの機関車製造業者は、すでにディーゼル機関車を開発していたトランジスタは開発されていたにもかかわらず、真空管のほうがかわいいために、トランジスタを十分に伸ばさないで、そのためにラジオの市場の大きな部分を日本に取られてしまったというよい実例である。

なお、日本でもこういった果敢な、古い製品を放棄して、新しい分野に乗り出すという言葉の非常にいい例が、東洋レーヨンあるいは帝人と、その製品である。これらの企業では主力製品であったレーヨンをどんどん減らし、合繊のほうに移っていったために、すでに世界市場において相当のシェアをもっているということがいえると思う。

東洋レーヨン、あるいは帝人の重役会に私がおったわけではないが、想像するにおそらく中でも相当有力な重役がこの際レーヨンを完全に捨ててしまうということは大へんな損である、これだけの売上げがあるのだから、それを切り替えることは危険だという議論を出したに違いない。

その際に、「われわれは、現在の売り上げをそう気にするよりも、明日の製品というものに力を入れなければならない」と、いい切るには、相当の勇気と決断が必要であったと思われる。

また、現在は市販されていないが、重役会にこれを十分つくあげ、製品化するという目標を立てて、そしてその目標通りいかなかったら、これをやはり切り捨ててしまうということにしなければいけない。

また製品の一つの形態はそなえているが、経済上の見通しを立てているために、二〇年間莫大な利潤をあげたといったような例がある。

なおこれは、実話であるが、このとき、これはよくないという報告をしたために、シレットが安く買い取ってしまったのである。

したがってこの製品だとか、製品でないとかの判定は、必ずしもこれは経理部門がこれを製品と扱うから製品だということはいえないのである。

経営とは何か

PFドラッカー

不必要なものはかかえこまない

研究設備についても、すでにアメリカでいろいろと失敗を繰り返しているのを見れば、日本で同じような間違いをせずにすむのではなかろうかと思う。

（次号へつづく）

12、対立のない経営

出光　出光には対立はないよ。社内的にないのみでなく、販売店とも対立なく、家族的にやっている。ふつう、特約店と、親会社というものは、外国では契約だから、両方に心のつながりなんかなく、対立している。契約だから、もし特約店が失敗したら、それはお前のやったことで、親会社としては契約どおり実行していればいいのであって、責任も同情もない。その特約店がつぶれれば、今度は他の人を連れてくる。人間の心のつながりというものはまったくなく、契約で、物によってつながっている。それだから、外国会社は非常に理屈っぽくて、こと細かに契約書をつくっているだけで冷たい。ところが、出光の場合は、販売店と心の「つながりがある。

これについては、こういういきさつがある。今から十四、五年前に、大阪の特約店の代表が何人か来て、ぼくに、外国会社に対するあり方のように、契約と金ですべてを決するような、人間味のないようなことを盛んに主張するんだよ。そこでぼくは、あなた方は出光の家族主義をてんで理解していないようだから、やめたらどうです、そのような考え方では、出光とうまくいきませんよ、とこう言ったんだ。ところが、その人たちは、ほんとうはまじめな人たちだったんだね。それに大阪だから商売の頭も早い。じっとぼくの話を聞いておったが、わかりましたと言って帰られた。今、販売店で出光の家族主義を理解しているのは、大阪のその人たちがいちばん強い。

それからガソリン・スタンドというのは、ほんとうは個人経営の小さな店のほうが能率を発揮するんだ。とても給料取りのサラリーマンがやっていては、経費ばかり高くついて引き合わない。ところが出光は、消費者直売主義だから、出光の直営と特約店と両方でやっていた。特約店に経営させることは、出光の消費者直売主義から言えば、ちょっと崩れることになるが、このほうが能率が上がって、費用が少なくてすむ。ということは、それだけ消費者に対するサービスになる。月給取りの出光の人間が経営していたのでは、経費がかかり、結局それは消費者に転嫁されるということになる。消費者が対立せずに、石油に関しては消費者が対立せずに、石油に関しては出光にまかせようということになれば、これは神に反する。そういうことで、特約店にお願いしておいたんだ。ところが、二、三年見ておる間に、出光のサラリーマンの経営のほうが能率が上がる。特約店のほうが能率が悪い。それで、これはせっかくやったけれども、今後は特約店はふやさずに、出光の直営のほうをふやそう、ということに会社内部で決議した。ところがよく調べてみると、その特約店の方々が出光の家族主義を理解して、出光といっしょに大家族になっていこう、という気運が盛り上がりつつあるときだったんだ。それならば、これはもう利害の問題ではない。お互いに大家族になって一致団結してやるならば、これは結構なことだから、特約店を大いに奨励して、大きくしていこうということに呼びかけた。そして大家族主義という名前を廃して、販売店ということにして、直営と第三者の販売店は価格その他、すべての面において、同等に扱う、ということにした。今ではもう、販売店も出光の大家族主義の中に、完全に溶けこんでしまっている。そこに、三、四万の従業員がいるが、出光の家族主義が徹底して、出光プロパーの若い社員も第三者の販売店の若い販売員も、大体違わないほどになっている。

そこで次に、現在出光がやっていることは、消費者も大家族に入れようということなんだ。出光と消費者が対立せずに、石油に関しては消費者が対立せずに、石油にまかせようということになれば、これは出光の大家族主義がさらに広がることになる。したがって、出光が消費者に今言っていることは、石油は出光におまかせください。価格も供給も出光が全責任をもってやりますから、あなた方は本業に全力を注ぎなさい、ということだ。しかもこれは、出光としては単に言うだけのことではなくして、実際にいろいろ実績を示してきている。

（以下次号へ）

ルマ・パンジャン

南方華やかなりし頃

宗像太郎坊

おまけに垂れの端に、松村とネームまで墨で書いてある。松村君、よほどあわてたか、よっぽど酔っていたか、褌を忘れて帰ったのである。布類のない時なので、これは儲けたとばかりにお蔵き、確かここにつけていたと、兵隊の真似をしていたのである。

褌もハーレも欧の文句じゃないが、これこそ「兵隊さんのおかげです」である。翌晩もまた話しおいてたので主計の奴裏座に一枚を丸めて、肩にかるって嬶に消えて行った。あと見送っている吾輩こそ頼りない週番士官殿である。

砂糖の話

砂糖の歴史

田中重雄

大西洋沿岸での発展状況　前述の如く地中海沿岸諸国が砂糖生産の旺盛を極めたが、新航路の発見により衰微したと記したが、これはポルトガル人により、大西洋上に砂糖の新生産国が出現したのである。

ポルトガルはイタリーの諸都市に反抗して商権を確立しようと努めた革命児である。従来航路を南方に開拓し、そのステップ・ストンとして占領を企てたのがマデイラである。ポルトガルが西紀1419年に同島を占領するとともに、植民を企てた後、西紀1419年にシシリイから甘蔗を輸入し砂糖を製造したのが、大西洋沿岸における起源である。

以来ナポレオン時代まで繁栄を続けた。ついでブラジルに砂糖がおこり欧州市場を支配した。その後ポルトガルは一四四四年にアゾアを獲得し、一四五六年から四六一年にはケープワーを占領、一四九六年にギニア湾内のプリンシプ、サンタム及びアンノボン等を占有して糖業をおこし、天恵の気候と黒奴の労力を利用して低廉なる砂糖を造り、首都リスボンを経てロンドンに輸出した。これがため西欧の中心市場はヴェニスからロンドンに移った。

この時ゼノアのクリストフア・コロンブスは、ポルトガルと同じくマルコポーロに動かされ新航路の開拓を企図した。

（次号へつゞく）

宗像藪庵先生百話

ついでに夜遊びのことを書いておこう。

スマトラでは土民に戸籍はない。田舎に行くと、竹で作った家であるが、一年もたつと崩れて了う。駄目になると自分の気に入った場所に、友達二、三人連れて来て、新しく竹で家を作る。蚊が多いので、床を高くし、下で火を焚いておいて寝ると、消えかかった木からいつまでも煙りが上り、これが蚊を追っ払う役をする。寝るといっても竹を並べた床に莫座一枚敷いてろ寝である。家にちょっと、いかす娘がいると、村の青年がこっそり床下に来て、娘が寝ていると思われる床下より小さい木の枝を差し込んで、娘の脇を突いて呼び出す。これが間違って母親の脇をつついたりすると、母も脇に傷持つ身なれば古びた石段をおりると、余った水が滝となって滔々と落ちている。ここより、どんどん、坂を登ると、ブラスタギーに達する。噴煙たなびくシナブン山（海抜二、四二一米）とシバヤック山の中間にあり、メダンより六三粁、海抜一、六〇〇米の避暑地である。

（次号へ続く）

ブラスタギー

メダンよりコタ・チャネの道路作業に向うのであるが、スマトラは日本の二倍もあり、ちょっと、隣りの町に遊びに行くにも、十里の二倍もあり、友達二、三人連れて来て、新しく竹で家を作る。蚊や二十里はある。パンダルバルを過ぎブラスタギーの山麓に達すると右手の木々に隠れたところに温泉がぶくぶくと湧いている。地獄湯といっていたが、日本だったら権利を奪い合って、直に温泉が出来、町が出来るのであるが、人口が少く、かえりみる者もない。

すこし上ると右手に水源池の監視所があり日本兵が二個分隊いた。この水でメダン七万人の人間をまかなっていたので、わたしは襟をかけて、ここまで衛生巡視に来たことがある。左側が水源池で百の石段を下ると、余った水が滝となって滔々と落ちている。ここより、どんどん、坂を登ると、ブラスタギーに達する。噴煙たなびくシナブン山（海抜二、四二一米）とシバヤック山の中間にあり、メダンより六三粁、海抜一、六〇〇米の避暑地である。

（次号へ続く）

我楽苦多告知板

○宝物館に来た中年の御婦人方、石造狛犬一対の前で。

「どっちがオスでどっちがメスかな？」

「そりゃ玉を抱いている方がオスで、子獅子を抱いているのがメスだい」

石造狛犬には、雌雄判別の彫刻はない、念の為。

○或るおやじさん、繁華街のパチンコ店で、大学生の伜とバッタリ出会った。

両人ともにっこり笑い、伜は手を出し、おやじさんは手をポケットに突込んだ。

「伊藤博文」が伜の手に納まると、二人は親しい友人であるかのようなそぶりで左右に別れた。